The Interactions between Constructions and Lexical Meaning : A Cognitive View

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-10-02
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/1005

認知文法から見た語彙と構文

―自他交替と受動態の文法化―

中　村　芳　久

1．はじめに

語彙と構文、あるいはより一般的に、語彙と文法ということについて、symbolic alternative の立場をとる認知文法の枠組みでは、語彙と文法はいずれも記号構造として連続体を成している。そこで問題になるのが、語彙と文法が具体的にどのように連続しているのか、あるいは語彙の意味と文法的要素の意味がどのような連続体を成しているかということである。厳密に言うと実は、文法化・主体化の観点が Langacker（1998）の以前と以後では少なからず変化しており、そのため、語彙と文法の連続性に関しても、その具体的な中身が変化したということになる。文法化と主体化が記号関係にあることは変わっていないが、Langacker（1990）においては、語彙的要素が文法的要素へと発達する文法化の過程とは、語彙の客体的意味が徐々に主体的意味に転換し、後者のみを表すようになる過程であった。そうすると、語彙と文法的要素の連続性とは、(1a)のようにより文法的な要素になるにしたがい、客体的意味が徐々に減少し、主体的意味が増加していくような連続性だということになる。

(1)　symbolic alternative：語彙と文法的要素は記号構造として連続的

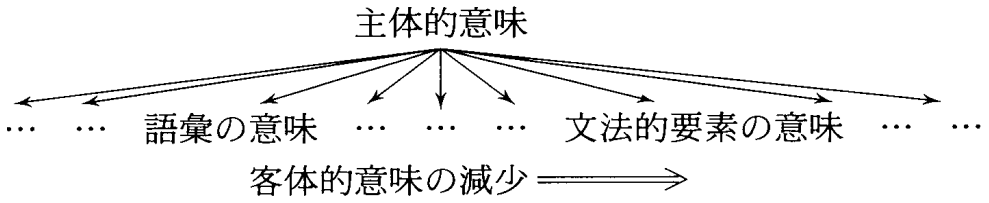
a．Langacker（1990）における連続性：

… …　語彙の意味　… … …　文法的要素の意味　… …

客体的意味の減少 ⟹

主体的意味の増加 ⟹

b．Langacker（1998）における連続性：

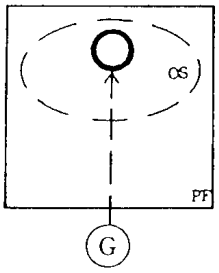


これに対して Langacker (1998) の主張では、語彙はほんらい客体的意味と主体的意味の両方を表しており、文法化の過程で客体的意味を徐々に表さなくなり、ついには主体的意味のみを反映するようになると修正された。つまり、語彙が文法化すると主体的意味のみを反映することになるから、語彙とそれから発達した文法的要素は、(1b)で示されるように共通して、主体的意味を反映し、語彙から文法的要素へと発達していくにつれ客体的意味が減少していくことになる。もちろんこの議論は一般化すぎるし、客体的意味、主体的意味という用語も便宜上のものである。本論では、客体的意味、主体的意味ということの内実に踏み込んでいきながら、文法的要素の一つである構文について認知文法の枠組みからどのようなことが言えるのか、自他交替と受動態の文法化を分析を通して明らかにしていく。

2. 主体的意味（認知主体の認知プロセス）と言語

認知文法の特徴を一言でなにか、ということになると、人によってビリヤードモデルであったり、絵図による意味表示であったりするかもしれないが、意味が conceptualization（認知像形成過程）であるという点に注目すると、意味が単に叙述内容（認知像、客体的意味）だけでなく、その叙述内容が形成されるまでのプロセス、つまり認知プロセス（主体的意味）も「意味」としてそのスコープに収まっているということになる。意味が認知プロセスまでをも含むという点は、これまでの意味論や意味に基づく文法理論の中心に据えられることはなく、認知文法独自の大きな特徴だと言える。意味が概念形成者の認知プロセスとそれによって形成される叙述内容の全体を含むという観点は、(2)の図のステージモデルにもっともよく反映している。ちょうど観客が劇場で舞台上の劇の展開を観るときのように、認知の拠点 G（主に認知主体）があり、そこからさまざまな認知プロセスによって眼前の事態を捉えるその認知の総体が、言語表現には反映するという観点である。

(2)

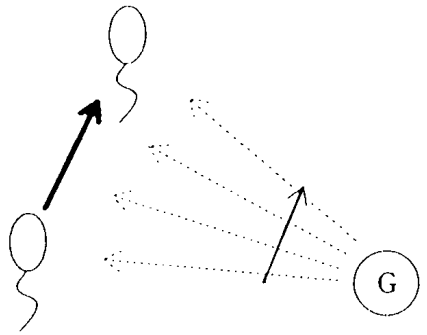


意味に認知プロセスを含める視点の重要性は、(3)の rise の二用法に窺うことができる。

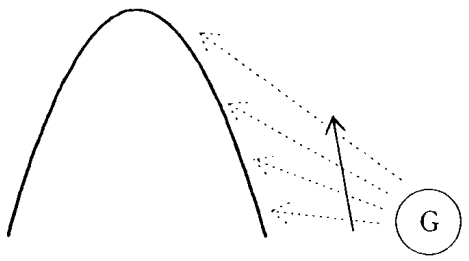
(3) a . The balloon rose swiftly.
b . The hill rises gently from the bank of the river.

(3a)の rise (RISE1) は風船の上昇を叙述しているが、(3b)の rise (RISE2) は丘の形状を叙述している。モノの動きを叙述するはずの rise がどうして動きの無い対象の形状を叙述できるのか。このナイーブな問への解答は、rise の叙述内容だけに注目していたのでは、みつからない。専門的には、動きを表すプロトタイプ的な語義 RISE1から形状を表す RISE2が拡張したとするとその共通部分つまりスキーマは何かということである。ここで、認知の拠点 G の認知プロセスを考慮して RISE1と RISE2の意味をそれぞれ(4)(a)(b)のように表示してみよう。そうすると、RISE1と RISE2の叙述内容が、認知の拠点 G からの、いわば視線の上昇とでも呼べるような認知プロセスによって捉えられる対象の動きや形状であり、視線の上昇という認知プロセスが共通していることが見て取れる。

(4)



(3a)の RISE



(3b)の RISE

認知プロセスを考慮して rise のそれぞれの用法の意味記述をすると(5)(a)(b)のようになり、rise は一般に「視線の上昇でとらえられるモノの移動や形状を叙述する」(5c)ような語彙的な言語形式ということになる。

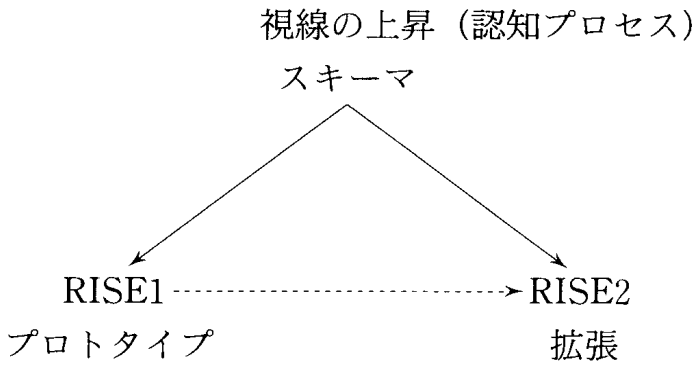
(5) a . RISE1は視線の上昇という認知プロセスで捉えられる風船の上昇をプロファイルする。

b．RISE2は視線の上昇という認知プロセスで捉えられる丘の形状をプロファイルする。

c．rise は一般に、視線の上昇という認知プロセスで捉えられる事態を叙述する。

視線の上昇で対象を捉える認知プロセスは、実際には気の遠くなるような複雑で細かい一連の認知プロセスから成るはずであるが、ここでは便宜上その複雑なプロセスを「視線の上昇」という一言で押さえておくことにする。このような認知プロセスを考慮しない場合と比較すると明らかなように、二つの用法のスキーマは、叙述内容にあるのではなく、「視線の上昇という認知プロセス」にあり、意味を、これまでのように叙述内容（客体的意味）のみと見なしたのでは、以下のような、rise のプロトタイプ的語義 RISE1と拡張 RISE2とスキーマの 3 角形は捉えられない。

(5)d．



さらに(6)の例を見てみよう。「城が兵士に囲まれた」「城が濠に囲まれている」という受動文の例であるが、(6b)の受動文はほんらい成立しないはずのものである。通常受動文では、何らかの働きかけを受け影響される参与体が主語になるが、(6b)では、城と濠の位置関係であって、働きかけや影響関係がなく、受動文は成立しないはずである。このような受動文が成立することについて、久野や高見（1998）の機能文法は、働きかけや影響がなくても、主語を特徴付けるような受動文は可能ということを発見した。たしかに(6b)の受動文は、当該の城を「濠に囲まれている城」として特徴付けている。このように特徴付けという観点から(6b)のような受動文を説明するのは大きな一歩であるが、そこには、通常の受身と特徴付けの受身はどのように連関しているのかという問題が生じる。

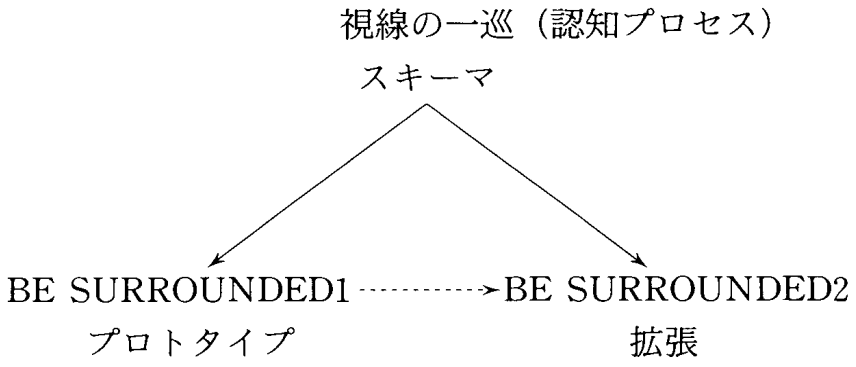
(6) a . The castle was surrounded by the soldiers.
b . The castle is surrounded by a moat.

叙述内容だけに注目して、(6a)の BE SURROUNDED1は、城が兵に囲まれていない状態から囲まれた状態への状態変化を叙述し、(6b)の BE SURROUNDED2は、城と濠のトポロジカルな関係を叙述している、とするような分析では両用法を繋ぐものは見えてこない。この場合も、認知の拠点 G における認知プロセスとして「視線の一巡」とでも呼べるような認知プロセスに注目すると、BE SURROUNDED1、BE SURROUNDED2は以下の記述が可能になり、スキーマを抽出することが可能になる。

(7) a . BE SURROUNDED1は視線の一巡という認知プロセスによって捉えられる城の状態変化をプロファイルする。
b . BE SURROUNDED2は視線の一巡という認知プロセスによって捉えられる城と濠の位置関係をプロファイルする。
c . be surrounded は一般に視線の一巡と言う認知プロセスによって捉えられる事態を叙述する。

この例でも認知プロセスがスキーマである点が興味深い。もちろん、言語表現が何を叙述しているかだけに注目する立場では、このような表現のプロトタイプと拡張とスキーマの三角形をうまく捉えることはできない。

(8)



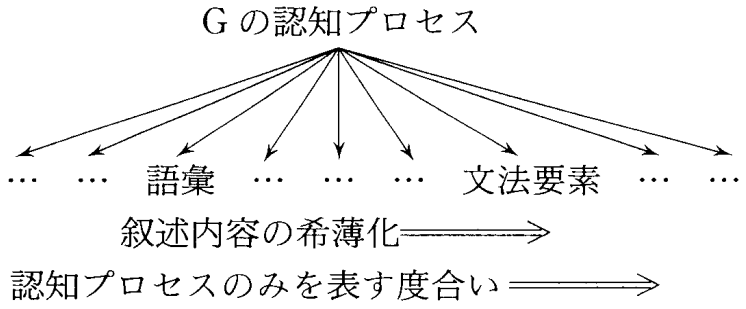
さてこのような立場、すなわち言語表現の意味が認知プロセスとそれによって捉えられる叙述内容から成るとする立場において、語彙と、構文を含む文法的要素についてどのようなことが言えるだろうか。語彙的要素は意味として何を表し、文法的要素は意味として何を表しているか、ということで

あるが、結論的には、これまで見てきたように、言語表現はなんらかの認知プロセスで捉えられる叙述内容をプロファイルするのであり、とりわけ語彙的要素は、特定の認知プロセスで捉えられる（具体性の高い）モノや事態をプロファイルし、文法的要素は、なんらかの認知プロセスのみを反映する、ということになる（cf. Langacker 1998）。

(9) a．言語表現は一般になんらかの認知プロセスで捉えられる叙述内容をプロファイルする。
　b．語彙的要素は特定の認知プロセスで捉えられるモノや事態をプロファイルする。
　c．文法的要素はなんらかの認知プロセスのみを反映する（reflect, manifest）。

それぞれの言語表現がこの通りであるとすると、認知プロセスを語彙も文法的要素も反映している点では語彙と文法的要素は同じであるが、叙述内容について、語彙的要素が叙述内容を表し、文法的要素が叙述内容を表さないという点で違っている。ただしこの場合、語彙と文法とは叙述内容を表す、表さないの二分法ではなく、より語彙的であればその叙述内容は豊富であり、より文法的であれば叙述内容は希薄である、というような連続性を成している。より文法的であれば、プロファイルする叙述内容が希薄になるから、文法的要素の反映する認知プロセスはより目に付くということになる（決して、文法的要素の方が認知プロセスを多く反映しているのではない）。

(10)



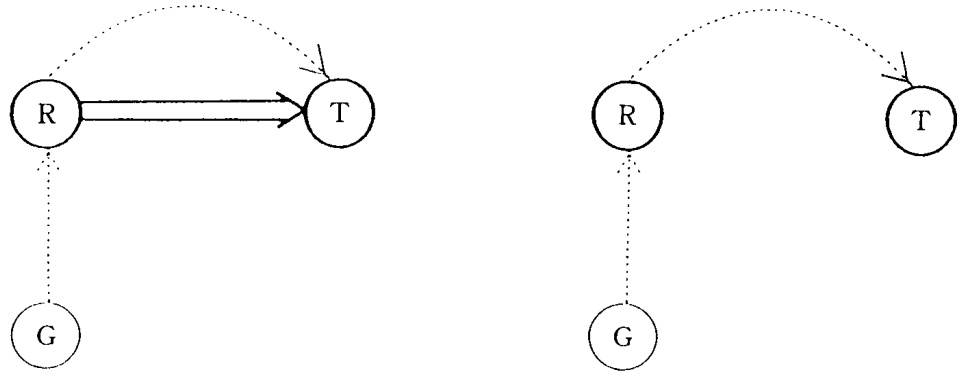
語彙と文法的要素を叙述内容の希薄化のスケール上に位置付けると(10)の図のようになる。しかし、重要なことは、語彙も文法的要素も、その叙述内容が具体的な場合であれ、抽象的な場合であれ認知プロセスが関わっている点である。

語彙と文法的要素の表す意味構造の違いや連続性を、さまざまな用法をもつ have で見ておくことにしよう。

(11) a . Watch out-he has a gun!
b . An elephant has a long nose.
c . She has two brothers.
(12) a . Sam has a wart on his elbow.
b . That theory has many serious problems.
c . We have a lot of coyotes around here. (Langacker 1993)

(11) の have はすべて具体的な意味、例えば、直接所有、全体部分関係、血縁関係をプロファイルしており、叙述内容だけに注目しても、これらの用法は記述可能であるが、(12) の have の各用法はもはや特定できない。(9) のように、言語表現は認知プロセスで捉えられる叙述内容をプロファイルするという立場に立てば、(12) の have の用法では、叙述内容は希薄化し特定できないということになる。しかし、どの have の用法にも何らかの認知プロセスが対応しているはずであり、そのような認知プロセスは、参照点能力による認知プロセスだと言うことができる。具体的な叙述内容をもつ (11a) と叙述内容のほとんどない (12c) の認知構造はそれぞれ次のようになる。

(13)



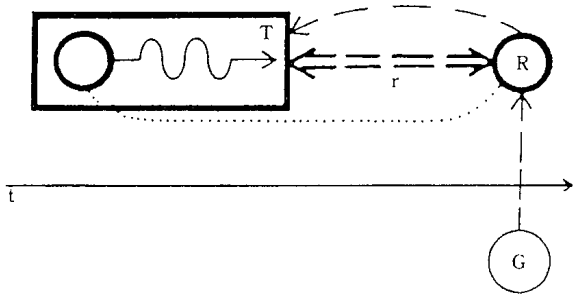
(11a) の HAVE　　(12c) の HAVE

(11a) の HAVE は、認知の拠点 G が参照点 R (he) を経由して認知の標的 T (a gun) に心的接触をする認知プロセスと、具体的な叙述内容である直接的所有 (二重線矢印で表示されている) を表わしている。これに対して、(12c)

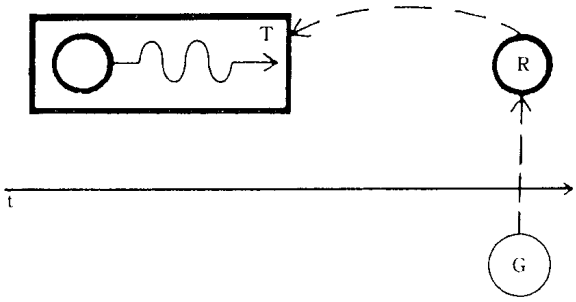
の HAVE は、具体的な叙述内容が希薄化しており、ほとんど参照点による認知プロセスを反映しているのみである。

また英語の完了形の have も文法的要素であり、それが表すのは認知プロセスのみで、「所有する」のような具体的な叙述内容はもたない。英語の完了形の起源は、have＋目的語＋p. p.という形式であり、その意味は「～されたもの（目的語）を持っている」であった。起源形の段階では、have は語彙として叙述内容（「持っている」）をも表していたことになる(14a)。

(14) a．完了形の起源：have＋目的語＋p. p.（「～されたもの（目的語）を持っている」）



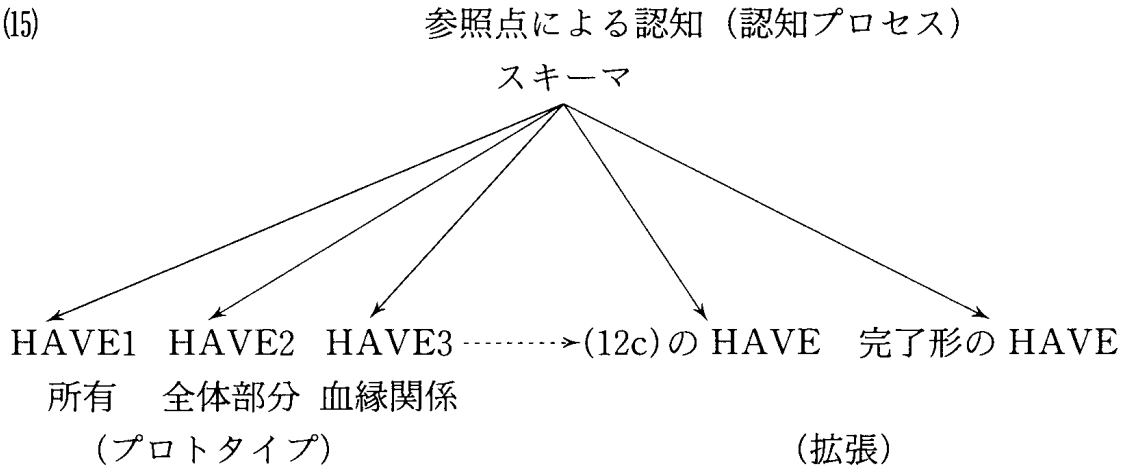
b．完了形：have＋p. p.（＋目的語）



それが、完了形として定着すると have は文法要素として、参照点を経由しての認知プロセスのみしか表さない。つまり、G はなんらかの参照点(例えば、路面が湿っている）を通して、過去に生じた事態（例えば、雨が降ったこと）に心的接触をする、というわけである(14b)。

これまでの例で用いられた have はすべて参照点による認知プロセスを反映しており、したがって、そのような have の参照点による認知プロセスはスキーマであり、完了形に表れるような文法的要素としての have はそのスキーマとしての認知プロセスしか表さない、ということである。

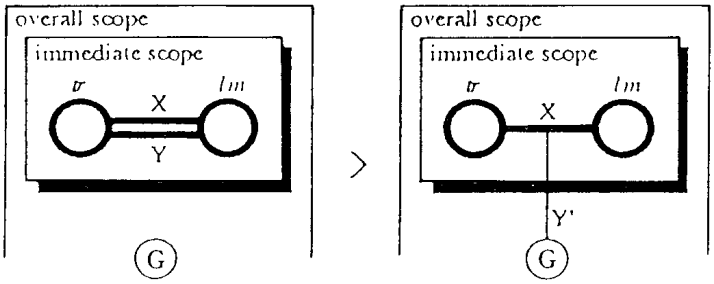
(15)



いま、言語表現は、認知プロセスによって捉えられる叙述内容をプロファイルし、とりわけ語彙は、特定の認知プロセスによって捉えられる具体的なモノや事態を叙述すること、また文法的要素は認知プロセスのみを反映するということを確認しようとしているわけであるが、これまでのラネカーの論考を通して、このようなことが矛盾なく言えたかというとそうではない。

ラネカーには、主体化に対する二つの考え方、すなわち Langacker (1990) と Langacker (1998) とがあり、Langacker (1990) の主体化の考え方では、ここで述べていることと矛盾が生じる。まず、主体化とは文法化に記号的に対応する意味変化のことであるという主張、これはは最初から同じであり、これに異論はない。問題は主体化の内容である。Langacker (1990) では、主体化とは概略「語彙の表す叙述内容（客体的意味内容）が一部認知プロセスに転換し、その認知プロセスのみを反映するようになる過程」ということであった。すなわち、語彙の表す叙述内容の一部が認知プロセスに転換するということであるが、そうすると、理論上、文法化しない（つまり主体化しない）語彙的要素は認知プロセスと対応せず叙述内容のみを表しているということになり、言語表現は何らかの認知プロセスによって捉えられる叙述内容を表す、という一般化があやしくなる。

(16) a．Langacker (1990) の主体化：語彙のプロファイルする叙述内容 (X、Y) の一部 (Y) が、認知プロセス (Y′) に転換して、語彙が文法的要素へ変化する過程（文法化の過程）で、その認知プロセス（のみ）を表すようになる過程（下図参照）。



b．Langacker（1998）の主体化：特定の認知プロセスによって捉えられる具体的なモノや事態をプロファイルしていた語彙的要素が、(文法的要素になる過程つまり文法化の過程で）認知プロセス（のみ）を反映するようになる過程。

ところが、Langacker (1998) では、主体化の捉え方が修正され、(16b)のように語彙的要素と最初から対応していた認知プロセスのみを表すようになる過程が主体化である、ということになる。そうであれば、認知プロセスを反映していない語彙的要素の可能性はなくなり、これによって、語彙も文法的要素も含めて言語表現が何らかの認知プロセスによって捉えられる叙述内容を表すという一般化に問題がなくなる。

語彙と文法要素についてあえて二分法的な言い方をすると、構文を含む文法的要素は、認知プロセスのみを反映するということである。言語構造と根本的にかかわる認知能力や認知プロセスにどのようなものがあるだろうか。ラネカーは dimensions of imagery（認知像形成に関わる諸認知能力）として(17)の 6 つの認知能力を重視している（Langacker 1988、1991：5-12)。

(17) Dimensions of imagery（認知像形成に関わる諸認知能力）

a．認知ベース上にプロファイル部を認知する能力

b．プロファイル部の下位構造間に際立ちの強弱を認知する能力（とりわけ tr/lm)

c．一定の解像度（特定性の度合い）で認知する能力

d．一定のスケールとスコープで認知する能力

e．想定と期待との関連で認知する能力

f．パースペクティブに関わる認知能力

何かを認知するとは(17a)のように認知ベース上にプロファイル部を認識することに他ならず、それはわれわれの認知の基本であり、認知を反映する言

語形式の基本的意味構造は認知ベース上のプロファイル部として与えられる。(17b)は典型的にはtr/lmを認知する能力、(17c)は抽象化やスキーマ抽出能力と関係し、(17d)は認知像形成の際にどのようなサイズ・大きさで、どの程度の背景を含めて認知像を形成するかにかかわる認知能力、(17e)は、従来の前提と焦点、新情報・旧情報と関連する認知能力、(17f)のパースペクティブは視点や参照点、そして主体性(subjectivity)にかかわる認知能力である。

3. 語彙 vs.構文における認知プロセス

これまで、言語表現一般について、認知プロセスの重要性を述べてきたが、とりわけ語彙と構文の関連に関して重要なのは、(17)に挙げた6種の認知能力のうち(a)と(b)の能力、すなわち認知ベース上にプロファイル部を認知する能力とトラジェクター・ランドマークを認知する能力である。そしてここで留意すべきは、語彙レヴェルの認知プロセスと文レヴェルの認知プロセスの区別である。特に、語彙レヴェルでの認知ベースとプロファイル部に対して、文レヴェルでの認知ベース部とプロファイル部とは明確に区別されるべきであり、動詞レヴェルのtr/lmと文レヴェルのtr/lmも混同されるべきではない。

例えば、tr/lm認知のレヴェル分けの必要性は(18)(19)のような例で実感される。

(18) a. As a young violinist, he played in the market place.
b. *As a young violinist, he played the market place.

(19) a. He is a young promising violinist. He has already played in the Albert Hall.
b. He has already played the Albert Hall.

(18b)から明らかなように、演奏の場所は動詞playのランドマークではない。(19)のようなコンテクストで、(19b)の文の目的語であるアルバートホールは何かということになるが、もちろん動詞playのランドマークではなく、文レヴェルのランドマークである。(文レヴェルのランドマークが慣習化して語彙レヴェルのランドマークとして定着することは十分考えられる。(cf. subject/object as clausal tr/lm))

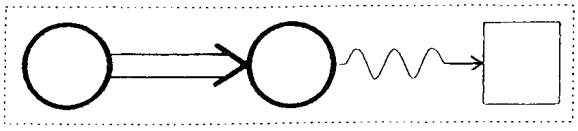
認知プロセスに注目し、かつ認知プロセスにレヴェル分けをすることによって、シンプルで明解な分析が可能になることを動詞の自他交替と受動文

の史的発達で見ることにしよう。

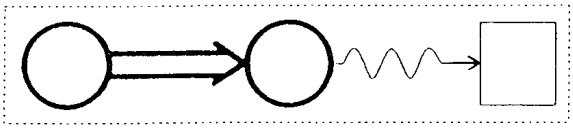
3．1　自他交替と認知プロセス

touch 系、kick 系、break 系、cut 系動詞の意味構造、すなわち認知ベース上のどの部分がプロファイルされているかを見ると、(21)のように、自他交替と呼ばれる言語現象はある程度予測することができる。

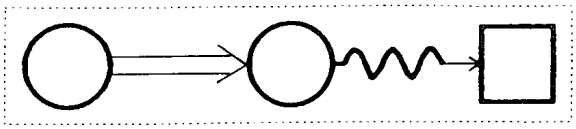
(20) a．X touched y.　*Y touched.



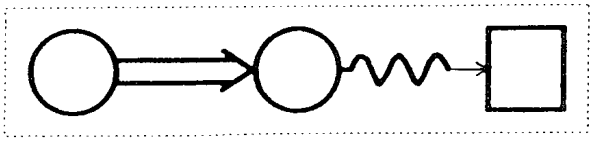
b．X kicked y.　*Y kicked.



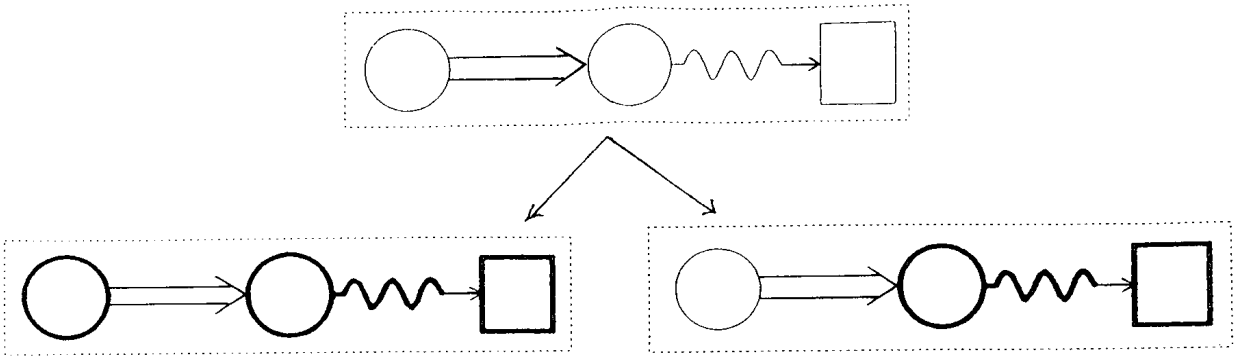
c．X broke y.　Y broke.



d．X cut y.　*Y cut.



(21)　自他交替：使役構造を認知ベースとして変化の部分のみをプロファイルする自動詞表現と、同一の認知ベース上の使役構造をプロファイルする他動詞表現が可能なとき、その動詞は自他交替する。



変化の部分をプロファイルしない touch 系動詞、kick 系動詞は自他交替しない(cf. (20a) (20b))。このことは自他交替には変化部分のプロファイルが必要であることを示唆しており、変化部分がプロファイルされていても cut 系動詞が自他交替しないことから(cf. (20d))、使役の働きかけの部分がプロファイルされていてはいけないことになる。端的に言えば、使役構造を認知ベースとして、変化部のみかあるいは使役構造全体のいずれかがプロファイル可能であれば、その動詞は自他交替する(21)、ということである[1]。

このように認知ベースとプロファイル部との関係で自他交替を捉えると、煩わされずにすむ問題が1つある。それは、自動詞から他動詞用法が派生するか、他動詞から自動詞用法が派生するか、という派生の方向の問題である。常識的には、同じ形態の動詞が、二つの用法を持つために、どちらかが基本で他方が派生だろうという発想になる[2]。実際これまでの概念意味論、語彙概念意味論からのアプローチでは、どちらかの派生方向を採用している。

(22) Guerssel (1986)：自動詞の意味に使役の意味が単純に加えられる（生産的な語彙規則、cf. Jackendoff 1983、Carter 1976)。

y come to be BROKEN ➜ x breaks y： [x cause [y come to be BROKEN]

(23) Hale and Keyser (1987)： [cause [separation in material integrity...]] のような PCS の構造に、cause と中心出来事の状態変化の両方に完全に変項が供給されると他動詞 break の LCS が導かれ、中心出来事にのみ変項が供給されると自動詞 break の LCS が導かれる。

[x cause [y, rigid or taut entity, develop separation in material integrity] , (by...)]

[y, rigid or taut entity, develop separation in material integrity]

(24) 丸田 (1998)：I (nitial) -LCS に適宜 INITIATE 部（始動部）が付加して、いわゆる使役的他動詞用法が派生する(transitivization)。INITIATE 部の付加は、Effector（行為体 cf. Foley and Van Valin 1984）を含む意味構造にのみ可能。

I-LCS (y breaks): [y **DEVELOP-SEPARATION**] CAUSE [BECOME [*y IN-PIECES*]]

X breaks y: [[x ACT ON y] INITIATE

[y **DEVELOP-SEPARATION**] CAUSE [BECOME [y *IN-PIECES*]]

(25) L & RH (Levin and Rappaport Hovav 1995)：x 項が存在量化による語彙束縛で抑圧され、もう 1 つの y 項が主語位置に実現される (detransitivization)。

[x do-something] cause [y become BROKEN]

for some causer x : [x do--something] cause [y become BROKEN]

(26) 影山 (1996)：他動詞の LCS から自動詞の LCS を導く使役主の項の抑圧を、語彙レヴェルでの変化対象項と使役主項との同定過程と見なす (anti-causativization)。

x opens y : [x control [y become [y be OPEN]

y opens : [x=y, control [y become [y be OPEN]

Guerssel のアプローチとそれ以前の古典的なアプローチ、それに最近の丸田 (1998) のアプローチが、自動詞から他動詞用法を派生させる方向で、L & RH と影山 (1996) のアプローチは他動詞から自動詞用法を派生させる方向である。Hale and Keyser の方法は認知的アプローチに近く、PCS (つまり Primitive Conceptual Structure) というような共通の構造を立てて、y 項が供給されるときは自動詞用法、x 項、y 項が供給されるときは他動詞用法が成立するという考え方であるが、PCS の理論的位置付けが明確ではない。前置詞 over のいくつかの語義のように、認知ベースが同じでプロファイル部だけが異なるような多義性がふつうにみられるが、自他交替もそのような多義性として扱うことによって、自動詞用法と他動詞用法に、意味量の大きく異なる 2 つの意味構造を与えずにすますことが可能である。

次は、どのレヴェルで自他交替が生じているかの問題である。認知プロセスを語彙レヴェルと文レヴェルとで区別したが、自他交替は文レヴェルの交替であると見なせるため、動詞に不必要な語義を与えずにすむということになる。ところがこれまでのアプローチでは、理論上、すべてを語義レヴェルで処理することになるから、自他交替も語義レヴェルで説明するしかなく、そうなると 1 つの語彙に不必要に多くの語義を与えることになる。

(27) (28) のような例では、clear という同一の動詞で交替が異なるが、他動詞から自動詞へ、自動詞から他動詞へのいずれの派生方向であっても、動詞 clear が目的語として the sky をとる場合と、the table をとる場合とでは、語彙レヴェルで交替を説明するかぎり、別々の概念構造を与えなければならなくなる。

(27) a . The wind cleared the sky.
b . The sky cleared.
(28) a . John cleared the table.
b . *The table cleared. (L & RH 104)

自動詞から他動詞用法を派生する立場の問題から見てみましょう。まず、自動詞 clear が主語として the table をとることを排除する方策が必要になる。次に、(27a) の The wind cleared the sky.は自動詞 clear からの派生であり、(28a) の John cleared the table.は自動詞からの派生ではないので、それぞれ異なる意味構造が必要となる。the sky を目的語にとるか、the table を目的語にとるかで、動詞レヴェルで異なる意味を与えなければならなくなる。この点を次のように整理しておく。

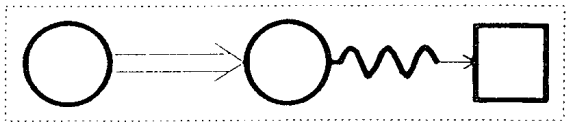
(29) 自動詞から他動詞を派生する立場：まず(28b)の自動詞 clear に the table を主語として排除する方策が必要。また自動詞からの派生である(27a)の他動詞 clear と自動詞からの派生でない(28a)の他動詞 clear とは異なる概念構造を持つということになる。

また、他動詞から自動詞を派生するという立場でも、the sky を目的語とする他動詞 clear は、主語を抑圧し自動詞用法を派生させ、the table を目的語とするときは主語を抑圧しない、ということを説明する必要がでてくる。L & RH は主語が抑圧されないのは、主語の働きかけが特定的であるためとする。（特定性の有効性はここでは問わないとして）そうすると、the table を目的語とする clean の概念構造には働きかけが特定的であることが示されていなければならないことになる。このアプローチでは、あくまで自他交替は語彙レヴェルの問題であり、the sky を目的語とする clean と、the table を目的語とする clean とでは、主語の働きかけの特定性について記述を異にする語彙概念構造が必要になる。この点を以下のように整理しておく。

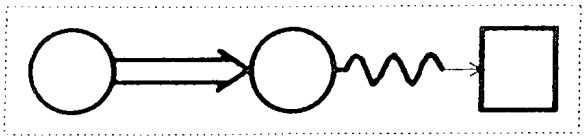
(30) 他動詞から自動詞を派生する立場：なぜ the sky を目的語とする場合は、主語が抑圧可能なのか。主語の働きかけが特定的であるため（L & RH 108）であるなら、the sky を目的語とする clean と、the table を目的語とする clean とでは、主語の働きかけの特定性について記述の異なる概念構造になる。

認知文法のアプローチでは、The wind cleared the sky.という具体的な使役的事態に対して、つまり文レヴェルの事態に対して、変化部のみをプロファイルするような捉え方が可能か否かであり、そのような捉え方が The wind cleared the sky.の場合は可能だから自動詞表現 The sky cleared.が成立し、John cleared the table.の場合はそれが不可能だから、The table cleared.が成立しない、という単純な原理である。動詞 clear の語彙レヴェルの意味は、break と同じで、使役構造を認知ベースとして変化のみをプロファイルする場合と、変化と使役主をプロファイルする場合で、いずれの場合も二重線矢印で示される働きかけの部分はプロファイルされていない。L & RH の用語を借りて言えば、特定性に関して、無指定であるから、この働きかけの部分は状況によって特定的でも不特定であってもよいということである。

(31) 語彙としての clear の認知構造（break の場合と同じ）



(32) 文レヴェル John cleared the table.の認知構造



John cleared the table.のように the table を目的語とし、人間を主語とする場合、ジョンのテーブルに対する働きかけが特定的になるためか、あるいは、ジョンの働きかけとテーブルがきれいになる過程が同時進行であるためか、文レヴェル（具体的な事態レヴェル）で働きかけが常にプロファイルされるために、テーブルの変化のみをプロファイルすることができず、自動詞表現が成立しないということである。

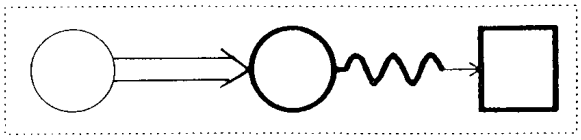
自動詞表現が可能になるのは、変化の部分のみがプロファイル可能な場合であるが、それは変化の部分が自律的な事態として捉えられる、ということに等しい。語彙意味論のアプローチのうちで、事態の自立性に着目して、他動詞から派生する自動詞用法を説明しようとしたのが影山（1996）である。事態が自律的に捉えられるか否かというのは認知的な観点であり、それによって多くの言語現象が説明できるが、自律的な事態の表記法に問題がある。事態が自律的であることを示すために、変化主体の y 項とその変化をコント

ロールしているｘ項が同一であるとき、変化は自律的であり、その変化は自動詞で表されるとされているが、例文(33)のように、変化主体ｙ項と使役主であるコントロール主のｘ項が同一ではなくても、自動詞用法が可能な場合がある。

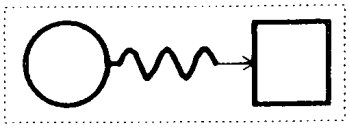
(33) I threw the plate against the wall, and it broke.

単にｙ項とｘ項が等しいというだけでは、自動詞用法を正しく捉えることはできない。認知的に自律的と捉えられる事態は(34)のように少なくとも３種類はあり、ｙ項とｘ項に言及するでけでは、自他交替に含まれる自律的事態をうまく記述することはできない。

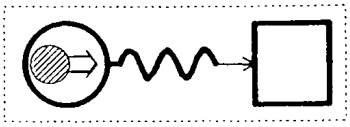
(34) a．自他交替動詞の自動詞用法の表す「自律的な」(autonomous) 事態



b．非対格動詞の表す「自律的な」事態



c．verbs of emission の表す「自律的な」事態



(34) (a) (b) (c) はいずれも自律的な事態であるが、認知構造が異なる。(34b) の非対格動詞は、認知ベースが使役構造ではなく、(34c) の verbs of emission の場合は、変化を引き起こす要因が変化主体内部にあると考えられるが、それは変化主体内の小円と矢印で示されている。非対格動詞と verbs of emission は (35) (a) (b) のように自他交替しないが、それは認知ベースが使役構造ではないために、他動詞用法が生じえないためであろうと考えられる。

(35) a．*X happened/occurred/appeared y. Y happened/occurred/appeared.

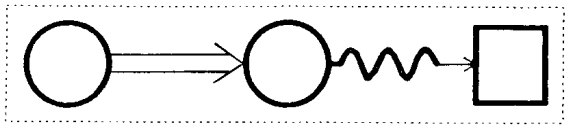
b．*X glittered/sparkled/flashed/buzzed. Y glittered/sparkled/fla-

shed/buzzed.

verbs of emission の動詞でも buzz と flash の場合は自他交替することが指摘されているが、そのような用法では、buzz と flash の認知ベースが使役構造であり、そのため他動詞用法が可能になっているということができる。

(36) a . The bees buzzed. *The postman buzzed the bees.
The doorbell buzzed. The postman buzzed the bell.
b . The lightening flashed. *The cloud seeding flashed the lightening.
The light flashed. The stagehand flashed the light. (L & RH 117)

(37) 自他交替する buzz の認知構造[3]



また、同じような現象に、消滅動詞の他動詞用法がある。(38a)の消滅動詞は一般には非対格動詞として理解されているが、丸田（1998）の挙げる他動詞用法(38b)をみると、そのなかの多くの動詞がすでに使役構造を認知ベースとするようになっているように思われる。

(38) a . vanish, evanesce, evaporate, disappear, fade,
b . You can vanish the coin completely. (Web3)
Then he vanishes a birdcage and its occupant... Finally he vanishes his wife. (OED)
We progressively disappeared the faces of the dodecahedron. (OED)
The magician may speak of disappearing and vanishing a card.
(American Speech (1949) XXIV : 41) [丸田　1998 : 158]

まず文レヴェルで、認知ベースとして使役構造を例外的にとるようになり、そしてたぶん使役構造を認知ベースとして捉えるような状況の増加も手伝って、認知ベースが使役構造であるような捉え方が語彙レヴェルで定着するようになっていくものと思われる。happen/occur/appear などの発現・出現動

詞には、他動詞用法が見られず、同種の動詞ではあっても出現動詞より消滅動詞のほうが、使役構造を認知ベースとする捉え方が成立しやすいということが推測される。

ここで、自他交替について認知プロセスを際立たせながら整理しておくと、(39)のようになる。

(39) 自他交替：使役構造を認知ベースとして変化部分のみをプロファイルするような認知プロセスで捉えられる事態を自動詞構文が叙述し、かつ同一の認知ベース上の使役構造全体をプロファイルするような認知プロセスで捉えられる事態を他動詞構文が叙述しうるとき、その場合の動詞は自他交替する。

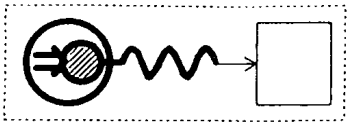
くり返し強調しておくと、この認知プロセスは文レヴェルで適用されるのであり、語彙レヴェルの認知プロセスが必ずしも文レヴェルに反映する必要はなく、逆に文レヴェルの認知プロセスが慣習化して語彙レヴェルに定着していくという考え方である。

さて(39)の認知プロセスからすると、(40)に見られるような行為動詞の自動詞・他動詞用法が、これまで見てきたような自他交替でないことは明らかである。

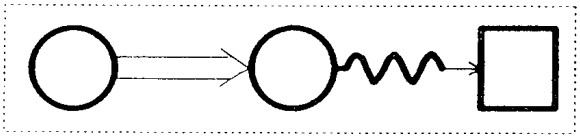
(40) a. They marched to the tents.
b. They marched the soldiers to the tents.
(41) a. The rider jumped over the fence.
b. The rider jumped the horse over the fence.
(42) a. We ran through the maze.
b. We ran the mouse through the maze.

これらの例で(a)文の動詞用法には、(43a)のように自らが自らに働きかけて行為するというような意味構造を与えることができるが、そのような意味構造を、使役構造を認知ベースにして捉え直したのが(b)文の認知構造であり、働きかけを受ける参与体が自らではなく他者に代わる、ということになる(43b)。

(43) a . They ran.の run の認知構造（結果状態にプロファイルはない）



b . They ran the mouse through the maze.の run の認知構造（前置詞を伴うから結果状態がプロファイルされる）



次の(44)のように、他動詞用法の場合、方向や着点を表す表現が必要とされるのは、行為を使役的に捉え直す際に、変化の存在を明確にしておく必要があるためだと考えられる。

(44) a . ??The general marched the soldiers.
b . ?The rider jumped the horse.
c . *We ran the mouse. (cf. Pinker 1989)

(45) a . *John walked Mary.
b . John walks the dog every morning.

(45b)で walk が目的語として the dog をとるとき方向表現が必要ないのは、その walk の意味が「散歩させる」であり、目的語の「犬」が散歩してない状態から散歩した状態に変わるという状態変化がすでに含まれているため、と言えよう。すなわち、動詞が walk で目的語が犬であれば、人が目的語の場合と違って、散歩による犬の状態変化が読み込みやすく、方向表現などで変化の存在を強調する必要がない、というわけである。

また、これまでの自他交替の議論ではあまり問題にされず、(39)でも扱えない以下の自他交代があるが、これらの自他交替を適切に位置付けるには、構文と関わるもう１つの認知能力、すなわち tr/lm を認知する能力を考慮する必要がある。

(46) a . I broke a finger.
b . My finger broke.

(47) a . Deer grow new horns in the spring.

She has grown her hair long.

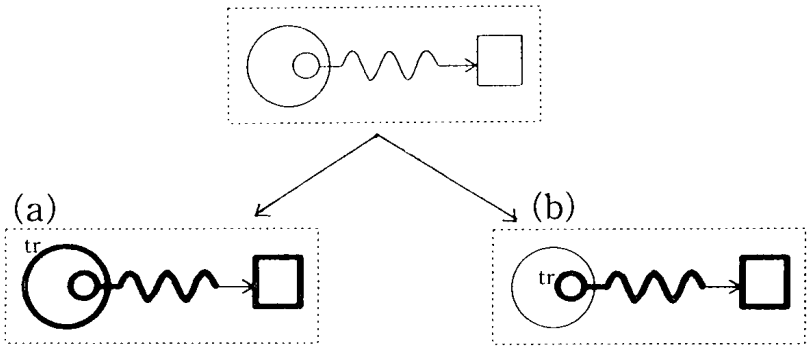
b . Her hair has grown long.

(48) a . My guitar broke a string.

b . A string of my guitar broke.

(46)(47)の例で、通常は自分の指に力を加えて骨折させたわけではなく、自らの力で角を生やしたわけでもない。(48)では、ギターがみずからの弦を切るということもないから、このような状況での自他交替は、使役構造が認知ベースではないので、(39)の交替ではない。主語と目的語が全体・部分の関係にあるすると、これらの例の交替は(49)のような認知構造の tr の交替と見なすことができる。つまり、全体をトラジェクターとするか（(46)から(48)の(a)文)、部分をトラジェクターとするか（(b)文）の交替である。

(49)



(a)文の認知構造　　(b)文の認知構造

換言すると、ここでの自他交替は、使役構造のどの部分をプロファイル部とするかによる交替ではなく、変化主体（指、髪の毛、ギターの弦など）をトラジェクター（tr）とするか(49b)、変化主体以外の参与体をトラジェクターとするか(49a)の交替である。いまそれを(50)のように要約しておく。

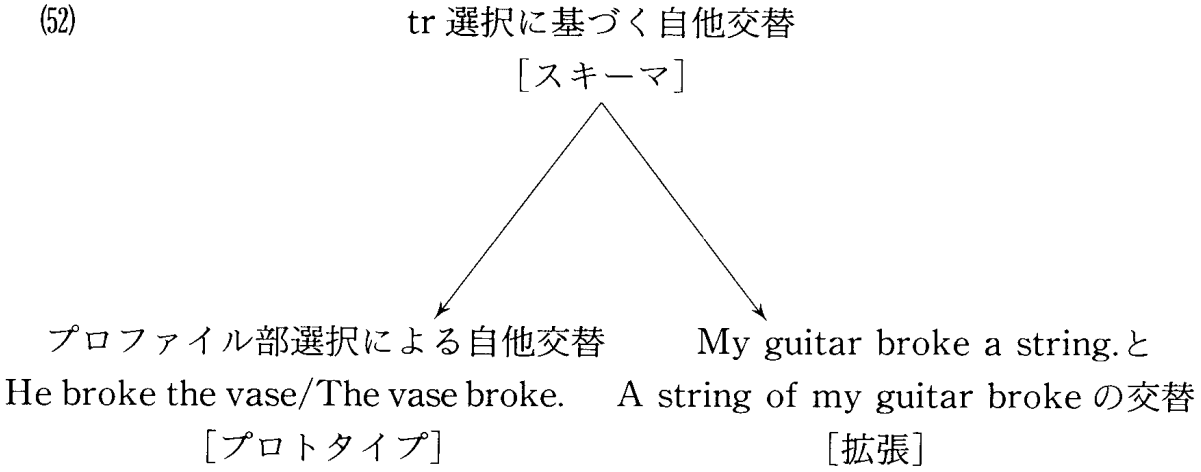
(50)　(46)〜(48)の自他交替：変化主体を tr として認識する認知プロセスよって捉えられる事態(49b)を自動詞表現が叙述し、変化主体以外の参与体を tr として認識する認知プロセスによって捉えられる事態(49a)を他動詞表現が叙述するとき、その動詞用法は自他交替する。

さて、(39)と(50)は異なる自他交替であろうか。(39)の自他交替で、変化部分のみがプロファイル部となるとき、その変化主体が自動的にトラジェク

ターであり、使役構造全体がプロファイル部の場合は、変化主体に働きかける参与体がトラジェクターであるから、(39)のプロファイル部による記述をトラジェクターによる記述に置き換えると、まったく(50)と同じになる。しかし、(51)のような場合同じ break でも交替しないことからも予測されるように、トラジェクター選択による自他交替の生産性は低く、英語ではまだ使役構造からのプロファイル部選択に基づく自他交替が主流であり、それが自他交替のプロトタイプだと言えよう。これを整理すると(52)のように、自他交替を、プロトタイプ、拡張、スキーマの三角形で捉えることができる。

(51) a . *The window broke a pane.
b . A pane of the window broke.

(52)



ここで、類型論的なコメントを加えておくと、ドイツ語や日本語には、I broke a finger./My finger broke.に対応する自他交替はあるが、My guitar broke a string./A string of my guitar broke.に対応するような自他交替はないから、英語の方がトラジェクターに基づく自他交替へより進行しているということが推測される[4]。

また、プロファイル部と tr/lm では、どちらも認知プロセスではあるが、プロファイル部の方は叙述内容(の意味量)と直結しており、tr/lm の方がより純粋な認知プロセスである。自他交替も、純粋に認知プロセス(tr/lm)に基づく(50)のような自他交替が生じているということである。

3．2　受動文の文法化と認知プロセス

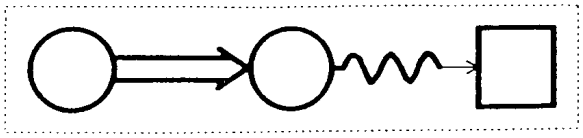
能動文、middle、受動文の間にはある種の発達関係が存在するが、そこに(52)に類似するパターンが見られる。スペイン語では(54)に見られるように、

能動文が再帰構文を経由して middle を発達させ、その middle が今度は受動文として機能し始めるということがある。

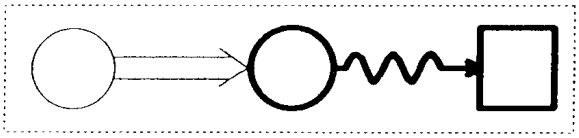
(53) a . Verónica se miró en el espejo. (Reflexive)
'Veronica looked at herself in the mirror.'
b . Tachita se peinó. (Body-action middle)
'Tachita combed herself.'
c . Tachita se sentó. (Body-action middle)
'Tachita sat down.'
d . Las gafas se quebraron. (Spontaneous middle)
'The glass broke.'
e . El edificio se construyó en 1982. (Passive)
'The building was constructed in 1982.'
f . Esos problemas se resuelven por autoridades competentes. (Passive)
'Those problems are solved by competent authorities.'
g . Esos problemas se resuelven por Juan. (Passive, esp. by an individual agent)
'Those problems are solved by John.'
(柴谷1997：20, Shibatani 1999)

このスペイン語の例で、(53d) の例文は The glass broke.に対応しており、これから、スペイン語の能動文と middle の対立が、英語の自他交替の対立と平行的であることがうかがえる。そしてその場合の対立は、使役構造を認知ベースとして使役全体をプロファイル部する認知構造と変化の部分のみをプロファイル部とする認知構造の対立であり、次のような認知構造で示すことができる。

(54) a . スペイン語の能動文の認知構造（使役全体がプロファイルの対象）

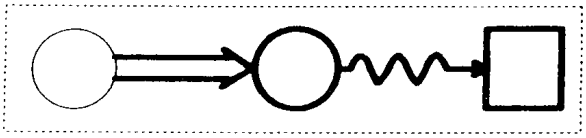


b．スペイン語の middle の認知構造（変化の部分のみがプロファイル部）（e.g.（53d））



興味深いのは、(54b)のような middle が受動文的機能を果たすようになり、受動構文として発達していくということである。スペイン語の middle の表す受動的意味は、能動文と同じく使役構造全体をプロファイルするが、受動的意味であるため、(55)に示されるように使役主はプロファイルされない。

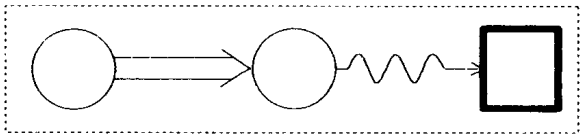
(55) スペイン語の middle の表す受動的意味（e.g.(53)(f)(g)）



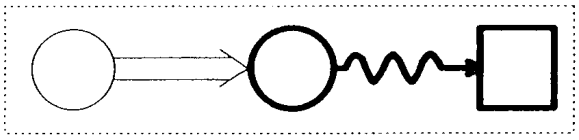
スペイン語の middle が受動的意味を表す場合、middle ほんらいのプロファイル部が拡大して、働きかけの部分までプロファイル部とするようになる、と言うことができる。また、スペイン語の middle には、kick 系、touch 系動詞のように変化をプロファイルしない動詞を用いることができないが、これはスペイン語の場合、middle の受動的用法では、変化部分がプロファイルされていなければならないことを示唆している。

さて、英語の be＋p. p.構造が現在のような受動構文として確立する過程にも同じような意味変化を認めることができる。OE の末期ころまで、be＋p. p. なる語彙構造は、次の(56)(a)(b)のような結果状態や状態変化しか表さず、受身的意味は表していない（Carey 1995, Terasawa 1997）。

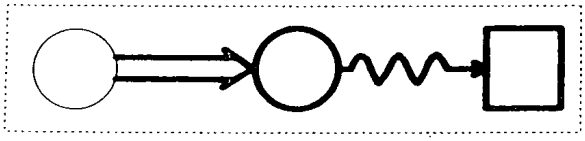
(56) a．My arm was (so) burned (I could hardly move it).（結果状態）



b . My arm was burned (as soon as I reached into the fire). (状態変化)



c . The town was destroyed (house by house). (受動態)



それが(56c)のように受動的意味を表すようになると、スペイン語の場合と同じで、変化部分のプロファイル部を含み、かつ働き掛けがプロファイルされる。

ところが英語の受動態は、さらに、kick 系、touch 系動詞も用いることができ、be surrounded のように認知的に非対称的な位置関係を表す動詞まで用いられるようになっている。

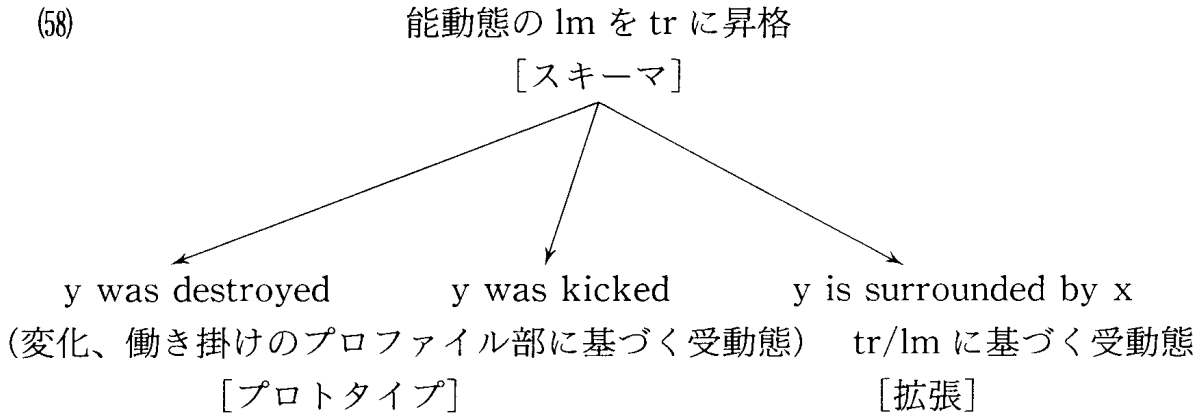
(57) a . John was kicked by Mary.
b . The castle is surrounded by a moat.

(56)では、「～の状態にある」から次に「～の状態になる」を表し、(56c)の受動態では「～されて～の状態になる」という具合に、プロファイル部が徐々に増加しているが、プロファイル部の増加は、叙述内容の増加と対応する。この変化、つまり(56a)から(56c)への変化は、叙述内容の増加であるから単なる意味変化と見なすことができる。しかし、(57)でのように、変化をプロファイルしない kick 系動詞が用いられ、さらに位置関係だけをプロファイルさせる surround のような動詞までが用いられる段階では、受動文は、能動文の tr を降格させ lm を tr に昇格させる機能になっている。もはや変化部分のプロファイルは関係ない。

(56a)の destroy が用いられる受動文でも、kick 系動詞が用いられる受動文同様、能動文の lm が tr に昇格するということが生じているので、受動文の認知的スキーマとしては lm の tr への昇格ということができる。そして、destroy や kick の用いられる受動態がプロトタイプであろうから、be surrounded のような受動態は拡張ということになり、ここでもプロトタイプと

拡張とスキーマの三角形が得られる。

(58)



受動態の場合でも、スペイン語と比べると、英語の方はやはり、使役構造や働きかけなどのプロファイル部をベースにした受動文から、純粋に認知的要素である tr/lm だけを問題にする受動文を発達させようとしていると言える。

4．結　語

これまでの議論を整理すると、第1点は、認知文法は、言語表現がなんらかの認知プロセスによって捉えられるモノや事態を叙述するという観点であり、認知プロセスを重視するということ。

第2点としては、語彙も構文も、プロトタイプ、拡張、スキーマの三角形を形成するが、いくつか対照的なところがある。まず、スキーマの認知プロセスは、語彙の場合特殊な認知プロセスであり、構文の場合一般性の高い認知プロセス、とりわけ tr/lm を認知する能力である。また、語彙の場合、プロトタイプも拡張も、叙述内容を持つが、構文の場合、プロトタイプの方はプロファイル部が中心的に関与し、拡張の方は、tr/lm だけの問題になる。

第3点は、第1点、第2点からの帰結として、語彙が文法化して文法的要素となる場合、どのような語彙が文法的要素になるかという点に関して、文法的要素はより一般性の高い認知プロセスを表すということであるから、文法的要素になる語彙は、もともとより一般性の高い認知プロセスによって捉えられるモノや事態を表す語彙ということになろう。すでに見たように、have は参照点能力によって捉えられるような関係を叙述するが、それが反映する能力が一般的であるため、文法化して文法的要素になりやすかったと言うことができよう。それに対して catch や grab はより細かい認知プロセス

によって捉えられる行為を表しているため、文法的要素にはなりにくいということであろう。

注目してよいのは、構文が文法的要素であるならば、意味を表すとしてもそれは語彙の持つような意味ではなく、一般性の高い認知プロセスということになるということである。Goldberg (1995) は、構文に意味があるという主張であるが、その場合語彙とまったく同じような意味ということであるなら問題である。構文が語彙ではなく文法的要素に近い要素であるなら、語彙と同種の意味を表すというのはおかしく、ここでの議論との関わりで言えば、構文はより一般性の高い認知プロセスを反映しているということになる。

注

1．例えば、次の例で break の自動詞用法は、使役構造を認知ベースとする事態の変化の部分のみをプロファイルする表現であるが、

a．He threw the vase against the wall, and it broke into pieces.

以下のような動詞の場合、cut 同様、働きかけが特定的で、その働きかけと対象の変化（生成）が同時進行的であるため、変化の部分のみをプロファイルすることができず、自動詞表現が不可能だということになる。

b．X assassinated/murdered y. *Y assassinated/murdered.

c．X sliced/carved y. *Y sliced/carved.

d．X wrote/built y. *Y wrote/built.

break も次のような用法では、自他の交代が認められない。これは、上の場合同様、働き掛けと変化の部分が不可分で、変化の部分のみを認知スコープに収めてプロファイルすることができないためということができる。

e．John broke his promise/the agreement/the world record/the routine.

f．*His promise/The agreement/The world record/The routine broke.

2．自他交代の動詞を OED でどちらの用法が史的に早く用いられているか調べてみると、自動詞用法が早いもの、他動詞用法が早いもの、両方の用法がほぼ同時期に用いられはじめているもの、さまざまである（cf. Kitazume 1996）。

3．この buzz, flash の用法は、clear の場合と違って、認知ベースを拡大しているから、語彙レヴェルの概念構造として与える必要があるかもしれない。

4．ここで注意すべきは、2種類の自他交替に現れている break の認知ベースは同じ使役構造だという点である。自他交替のプロトタイプの場合は、認知ベースである使役構造の使役全体をプロファイルするか、変化の部分のみをプロファイルするかの違いであるが、自他交替の拡張の方では、他動詞用法も自動詞用法の場合のどちらも（認知ベースは使役構造であり、かつ）プロファイル部は変化の部分であるが、違うのは、変化主

体が tr である場合と、変化主体でも使役主でもない別の参与対が tr であるかの違いである。この他動詞的用法の tr は動詞の tr ではなく、文レヴェルの tr として選択されたものだと考えられる。以上から明白なように (break の場合いずれにしても)、自他交替のプロトタイプでは、プロファイル部選択の交替であるのに対して、拡張した自他交替では、tr の選択の交替であると言うことができる。

REFERENCES

Carey, K. 1995. Subjectification and the development of the English perfect. Subjectivity and subjectification, ed. D. Stein and S. Wright, 83-102. Cambridge: Cambridge University Press.

Carter, R. J. 1976. Some constraints on possible worlds. Semantikos 1. 27-66

Foley, William A. and Robert D. Van Valin, Jr. 1984. Functional syntax and universal grammar. Cambridge: Cambridge University Press.

Goldberg, Adele. 1997. The relationships between verbs and constructions. Lexical and syntactical constructions and the construction of meaning, ed. Marjolijn Verspoor, Kee Donglee, and Eve Sweetser, 383-398. Amsterdam: John Benjamins.

Guerssel, M. 1986. On Berber verbs of change. Lexical project working papers 9, Center for cognitive science. Cambridge, MA: MIT

Hale, K. L. and S. J. Keyser. 1987. A view from the middle. Lexicon project working paper 10. Cambridge, MA: MIT.

Ikegami, Yoshihiko. 1988. Transitivity: Intransitivization vs. causativization: Some typological considerations concerning verbs of action. On language: Rhetorica, Phonologica, Syntactica, ed. C. Duncan-Rose and T. Vennemann, 389-401. London: Routledge.

Jackendoff, R. S. 1983. Semantics and cognition. Cambridge, MA: MIT.

Kemmer, S. 1993. The middle voice. Amsterdam: Benjamins.

Kemmer, S. 1995. Emphatic and reflexive-*self*. Subjectivity and subjectification, ed. D. Stein and S. Wright, 55-82. Cambridge: Cambridge University Press.

Kitazume, Sachiko. 1996. Middles in English. Word 47. 161-184.

Langacker, R. W. 1988. A view of linguistic semantics. Topics in cognitive linguistics, ed. Brygida Rudzka-Ostyn, 49-90. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.

Langacker, R. W. 1990. Subjectification. CL 1. 5-38.

Langacker, R. W. 1998. On subjectification and grammaticization. Discourse and cognition: Bridging the gap. ed. Jean-Pierre Koenig, 71-89. Stanford: CSLI.

Langacker, R. W. 1999. Virtual reality. Forum lecture given at the LSA Summer Institute, Univerity of Illinois.

Lemmens, Maarten. 1997. The transitive-ergative interplay and the conception of

the world : A case study. Lexical and syntactical constructions and the construction of meaning, ed. Marjolijn Verspoor, Kee Donglee, and Eve Sweetser, 363-382. Amsterdam : John Benjamins.

Levin, B. and M. R. Hovav. 1995. Unaccusativity. Cambridge, MA : MIT.

Pinker, S. 1989. Learnability and cognition. Cambridge, MA : MIT.

Schlesinger, Izchak M. 1995. Cognitive space and linguistic space. Cambridge : Cambridge University Press.

Shibatani, Masayoshi. 1999. Methods in Japanese linguistics : Contrasting Japanese and European perspectives. Course lecture, 1999 LSA linguistic institute at the University of Illinois.

Terasawa, Jun. 1997. The passive as a perfect in Old English. The locus of meaning : Papers in honor of Yoshihiko Ikegami, ed. K. Yamanaka and T. Ohori, 306-24. Tokyo : Kuroshio.

影山　太郎．1996．動詞意味論．東京：くろしお出版．

丸田　忠雄．1998．使役動詞のアナトミー．東京：松柏社．

中村　芳久．1998．認知類型論の試み：際立ち vs.参照点．KLS Proceedings 18.

中村　芳久．1999．ヴォイス・システム：態間関係の認知メカニズム．金沢大学文学部論集言語・文学篇第19号．39-65.

柴谷　方良．1997．言語の機能と構造と類型．言語研究112.1-32.

高見　健一．1997．機能的統語論．東京：くろしお出版．

山梨　正明．1995．認知文法論．東京：ひつじ書房．